三重県図書館協会報　2018年3月16日発行

協会だより No.69

目次

2019年（第105回）全国図書館大会が三重県で開催されます！……1
トピックス～図書館をめぐる話題から～……2
平成29年度図書館活性化推進事業のご報告……4
研修会のご報告……6
新館案内……8
ブックエンド……8

編集・発行　三重県図書館協会＝津市一身田上津部田1234　三重県立図書館内　電話：(059)233-1181

2019年（第105回）全国図書館大会が三重県で開催されます！

三重県立図書館

第105回「全国図書館大会inみえ（仮称）」を、来年（2019年）11月21日（木）、22日（金）の両日、三重県・三重県図書館協会や日本図書館協会などの主催で、三重県総合文化センターで開催します。全国の図書館関係者が一堂に会するこの大会は、1906年に第1回が開催されて以来、来年で105回目を迎え、本県での開催は初めてとなります。加えて、三重県立図書館は、来年、三重県総合文化センター内に開館して25周年の節目を迎えます。

そこで、昨年の10月12日（木）と13日（金）に第103回東京大会が開催され、三重県開催の参考とするため、県立図書館から2名の職員が参加しました。当日は、小雨模様でしたが、会場の国立オリンピック記念青少年総合センターには、全国の図書館関係者が続々と集まってきました。たくさんのボランティアスタッフの誘導・案内でスムーズに運営されていました。また、同センターには、食堂やカフェがあちこちにあり、これだけあれば参加者も昼食には困らないのではないかと感じました。

1日目は開会式や寺島実郎氏の記念講演「世界の中の日本、日本の中の図書館」が午後からありました。記念講演も大変興味深かったですが、強く印象に残ったのは、オープニングアトラクションでした。「弓削田健介&石川華乃音」さんの「図書館で会いましょう」の演奏と歌が実にさわやかで、大会を盛り立ててくれました。この曲は、前年の第102回全国図書館大会（東京大会）で発表されたそうですが、三重大会にも是非お呼びしたいところです。

2日目は、午前午後合わせて24の分科会が開催され、午前は第1分科会 公共図書館（1）「公立図書館の指定管理者制度」に、午後は第18分科会 健康情報「認知症と図書館を考える～超高齢社会をともに生きるために～」と第21分科会 出版と図書館「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」に、それぞれ参加しました。第18分科会「認知症と図書館を考える～超高齢社会をともに生きるために～」はNHKの収録があり、当協会の活性化事業で同様のセミナーをみなみいせ図書室主催で開催したところです。また、第21分科会は、文藝春秋社社長の「文庫本は借りずに買ってください」という話があり、複数のメディアにとりあげられ話題となりました。

2019年の三重大会では、会員の皆様としっかりタッグを組み、新元号スタートの年、希望あふれる図書館新時代の幕開けを三重から発信していきましょう。

前回地方大会（福岡大会）の様子

トピックス
～図書館をめぐる話題から～

「勢和図書館　本の森20th誕生祭」について

多気町立勢和図書館　林千智

２０１７年４月。20周年を迎える当館は、版画家・大野隆司さんの手刷り版画「死にたくなったら図書館においで」をお借りしホールに展示。また「握手をするように、本で！」というコンセプトのもと、準備を始めました。

こうした動きに、「図書館ジャズ」の方たちが「お祝いを〝夜ジャズ〟で！」と申し出て下さいました。５月末の夜、ジャズと版画と共に特設本コーナーにも触れていただいたみなさんからは、「Amazing! 1冊1冊がひとつの命のものがたり。この世に宿った大切な命に光を与えていくとりくみに心から感謝です！」などの声が寄せられました。

その後、「勢和図書館20歳おめでとう！企画実行委員会」が立ち上がり、50名もの地域内外の方々の手により、２日間の「勢和図書館　本の森20th誕生祭」が企画・実行されることとなりました。私たち司書の「図書館の20歳」としたい旨もご理解いただき、アイディアの検討から具体化まですべて、笑顔と話し合いのもと進めて下さいました。

７月１日。この日の午前中は「Shake hands Book　〝あくしゅぼん〟まつり」。小６の女の子から会社の社長さんまで、様々な方からの「あくしゅぼん」の紹介。午後にはドキュメント映画「四季・遊牧」上映会。小貫監督も交え、夜の交流会まで熱く濃密な時間が流れました。

２日目は「ほんとカフェ with 人形劇&お習字ワーク」。図書館への思いがつまった「〝ほんの木〟メッセージ展」（勢和在住絵本作家・たかはしなおこさん絵）の巨大メッセージ（２ｍ四方×２枚）をサプライズで贈呈いただくなど、２００名もの参加者のみなさんと共にお祝いすることができました。この場に立ち会うことができた私たちは本当にありがたく、これまで勢和図書館を支え育てて下さった多くのみなさまに、心から感謝いたしたいと思っています。

上映会は“投げ銭システム”です。
よろしく！

「社長さんの“あくしゅぼん”は？」
熱い１冊！

赤ちゃんタイムの取り組みについて

伊賀市上野図書館　四十野真由美

伊賀市上野図書館では、毎月第４水曜日午前10時15分から11時30分の間「赤ちゃんタイム」を実施しています。その中で、「おひざでだっこのおはなし会」の開催と職員による説明案内（児童開架と本の紹介・絵本の選び方・読み聞かせ方等）も行っています。

「赤ちゃんタイム」の時間は、「赤ちゃんが泣いても大丈夫！乳児や幼児連れの方に気兼ねなく図書館を利用してもらう時間です。」と館内

大人気！“やっほ～さんの人形劇”

掲示や放送でお知らせをして、他の利用者に協力をお願いしています。また、保護者が新規登録をする時や他のコーナーをゆっくり見たい時は、ボランティアや職員が赤ちゃんを見守って、本を借りてもらいやすい環境を提供しています。

はじまりは、ボランティアからの「岐阜県可児市みたいに赤ちゃんのための読み聞かせ会をやってみたい。赤ちゃん連れのお母さんは、子どもが騒ぐのではないかと心配して図書館に来ることをあきらめてしまう人もいる。気軽に来館してもらえる時間を作ろう。」という声でした。読み聞かせ会は、当館で活動する「いがぐり」「よもよも」「ちいさなねこ」の3つのボランティアグループが毎月順番に担当してくれることになり、平成25（2013）年9月から開始しました。実施当初は、「赤ちゃん連れが来館しやすい時間を」と設定時間を変更したり、場所は、たくさんの参加者が落ちついて座れるようにと児童コーナーのレイアウトを変更するなど、試行錯誤しました。

この「赤ちゃんタイム」をきっかけに、年齢があがると、次は幼児向けの読み聞かせ会に参加というように、継続した図書館の利用につながっています。いろいろな課題はありますが、あらゆる世代の人達に「本に親しんでほしい」という思いで、ボランティアと職員が協力しながら、取り組みを続けています。

魅力ある文化交流ゾーンをめざして

三重県立図書館

三重県では、県立図書館を含む県総合文化センター、県総合博物館、県立美術館が中核的な拠点（文化交流ゾーン）を形成することで、県民の皆さんが心の豊かさと安らぎを感じ、知的な刺激を受け、文化にふれる機会を多く提供することを目指しています。このことについては、「みえ県民力ビジョン」等で明らかにしており、これに基づき施策を展開しています。

文化交流ゾーンを構成する各施設の連携強化のため、これまで様々な検討がなされてきましたが、平成30年4月から、2つの取組が導入されることとなりました。

一つ目として、各館の長や外部有識者等で構成する「文化交流ゾーン連携・経営推進会議」が設置されます。各館の事業等に関して知の共有を行うとともに、連携の強化を図ります。

二つ目として、指定管理者制度を導入済の総合文化センターに加え、新たに図書館、総合博物館、美術館の業務の一部、①施設や設備の保守管理・警備・清掃、②文化交流ゾーン全体に関する広報、③文化交流ゾーンを利用いただいていない方のニーズ把握などに指定管理者制度が導入されます。施設管理の効率化を図り、職員が司書業務といった基幹業務に注力できる環境を整え、より良い県民サービスの提供に繋げていきます。

今後も、図書館をはじめ文化交流ゾーンの各施設が、三重の文化振興・生涯学習・人材育成・地域づくりに一層貢献する「学び・体験・交流の場」となることを目指してまいります。

平成29年度 図書館活性化推進事業のご報告

平成29年度の当協会による図書館活性化推進事業では、5館が助成の対象となりました。それぞれの館から、事業のご報告をいただきました。

①図書館が伝える地域情報 鳥瞰図「西桑名」に描かれた在りし日の桑名

桑名市立中央図書館　松永悦子

当館では、開館以来、桑名市の昭和時代に関する資料を、市民の方々からのご提供や、調査活動を行うなどして収集し、地域資料として整理しています。

一昨年の調査中、鳥瞰図絵師吉田初三郎が描いた鳥瞰図「西桑名」の原画（昭和9年）が市内で見つかりました。太平洋戦争や伊勢湾台風など、昭和時代の惨禍をくぐり抜けたこの鳥瞰図は、現在当館の貴重な地域資料となっています。

目で見て楽しむことができる鳥瞰図は、歴史をわかりやすく伝えてくれます。本事業では、この資料の特徴を生かし、これまでに収集した古写真や市民の方々からの聞き取りをつなぎ合わせ、鳥瞰図に描かれた昭和時代の桑名の風景やその歴史を学ぶ冊子を作成しました。

その他、鳥瞰図を生かした展示や郷土史家による講演会を開催し、図書館の資料が身近に感じられる取り組みを行いました。

図書館の地域資料を通じて市民の皆さんが郷土に誇りを感じ、愛着を持つことができるよう、今後も資料を生かした取り組みを展開していきたいと思います。

鳥瞰図を題材にした
郷土史家による歴史講演会

②図書館で謎解き&動物園！

鈴鹿市立図書館　韓みなみ

当館では、図書館活性化のため、2つのイベントを実施しました。

一つ目は、利用が少ない若年層を図書館に呼び込むため、また図書館の魅力を再発見していただくことを目的とした「鏡の国のアリス × 鈴鹿市立図書館」（体験型謎解きイベント）です。館内全体に謎を散りばめ、図書館の使い方等を謎に組み込むことで参加者に楽しみながら館内を巡り、図書館の使い方を学んでいただきました。

二つ目は、動物や環境保護、親子の絆の大切さを学んでいただくことを目的とした「来て見て学んで　上原動物園」です。鈴鹿市在住の上原正廣さん制作、実物大に近い本物そっくりな動物像作品を多数展示しました。作品を触ったり、写真撮影を可能とすることで子ども連れでも参加しやすくし、また、材料や制作過程の展示、実演、動物や環境に関するクイズ等により、学びの場としての図書館の魅力を感じていただけるよう工夫しました。

両イベントとも参加者へのアンケートでは「楽しかった」「また開催してほしい」など、大変に高評価をいただき、目的を達することができました。

今後も参加者に楽しんでいただきながら図書館活性化に繋がるような企画を開催していきたいと思います。

鏡の国のアリス × 鈴鹿市立図書館

③フォーラム「超高齢社会をともに生きるために～高齢社会につなぐ図書館の役割～」を開催して

みなみいせ図書室　田中由紀子

超高齢社会において、地域住民を対象にサービスを行う公共図書館が、増加する高齢者の知的欲求と余暇の受入れなどの、高齢者を対象としたサービスにとどまらず、高齢化とともに増加する認知症と図書館のあり

方をともに考え、話し合うことで、認知症にやさしい図書館づくりのきっかけとすることを目的に開催し、約30名の方が参加されました。

午前の部では、筑波大学の呑海教授に「ともにつくる認知症にやさしい図書館とそのガイドライン」、森ノ宮大学の松下教授に「認知症の人へのかかわり方」についてご講演をいただき、午後の部では、参加された図書館関係者と福祉行政に携わる職員の皆さんで、ワークショップを行いました。

まだスタートラインに立ったところですが、関係各所と協働しながら、少しずつでも地域社会にさらに必要とされる図書館に成長していきたいです。

④地域に必要とされる図書館を目指して

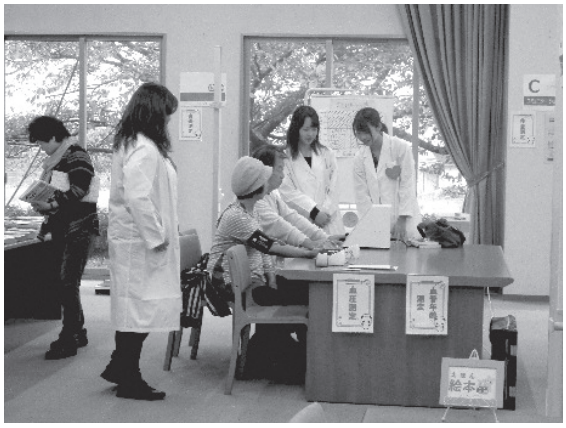
鈴鹿大学附属図書館　榊原尉津子

本学附属図書館では、10月21日（土）・22日（日）の大学祭にて、今年度スタートしたこども教育学部1年生による「からだにいいサプリメントは図書館にあり！」と題して、地域の方への健康サポート事業を開催しました。

今回は、幼児教育と養護教育の学生が専門知識と技能を活かし、来場者の身体測定をメインに食育・歯磨き指導を行いました。一番人気の血管年齢測定体験者からは「食生活を見直す良いきっかけになった」とお声を掛けていただきました。子どもたちに一番人気の缶バッチ作りでは、2日間来てくださったお子さんもいて、食育に関する絵本の読み聞かせ、エプロンやパネルシアターにも興味津々といった様子で好評でした。

台風という悪天候でしたが、2日間で900人以上の来場があり、本学図書館が一般開放された気軽に利用できる場であることを知っていただく良い機会となりました。

今後も地域に必要とされる図書館を目指し、地域貢献活動を実施していきたいと考えます。



測定している様子

⑤鈴鹿高専〝本とふれあうミニコンサート〟を開催して

鈴鹿工業高等専門学校図書館　藤田時子

昨年4月に図書館に配属され、三重県図書館協会の総会に出席した際に図書館活性化推進事業助成金制度があることを知りました。本校図書館では一般開放しているものの、一般利用者が少なく、日頃からどうすれば増加させることができるか苦慮しておりました。

本事業は、図書館のあるマルチメディア棟内に、昨年、憩いの場として整備されたスペース（コノハナラウンジ）を有効活用し、本校音楽部学生による楽器演奏で癒しのひと時を味わってもらい、地域のみなさんに本にふれあう機会をつくるという取り組みでした。

音楽部学生も快く引き受けてくれ、当日は木管二重奏、サックス四重奏、金管四重奏から打楽器も入った小編成演奏まで多彩な曲を10数曲演奏してくれました。

開催前は参加人数など不安な点も多くありましたが、100名余りの方々が参加していただき、成功裏に終了することができました。

ぜひ、今後もこのような図書館活性化に向けた取り組みを行っていきたいと思います。

研修会のご報告

図書館職員基礎講座

比較的経験の浅い職員向けの研修である基礎講座を、9月15日に津市の三重県生涯学習センターで開催しました。「レファレンスのアイディアと発想法」をテーマに、神奈川県立川崎図書館の高田高史氏を講師にお招きしました。この研修には、39名にご参加いただきました。参加された方の中から、あさけプラザ図書館の広瀬恵美さんにご報告をいただきました。

図書館職員基礎講座に参加して

あさけプラザ図書館　広瀬恵美

今回の研修では、そもそも図書館ではなぜレファレンスを行うかということから、レファレンスのコツや利用者が描く図書館員のイメージなどを教えていただきました。

図書館を家電量販店にたとえ、炊飯器を買いに来たお客さんがどのように希望の商品を探し出し満足して帰られるのかを例に、家電量販店の店員の案内方法や炊飯器に対する知識、どのように接するかによってお客さんの満足度が変わり、また行こうに繋がっていくのかを分かりやすくお話しされました。

図書館員は情報の案内人であり、レファレンスとは、情報の宝庫の中で眠っている資料を探し出す作業です。利用者は家電量販店の店員が家電に詳しいように、図書館員は皆本に詳しいと思っており、レファレンスの良し悪しによって図書館のイメージが変わります。日々、様々なレファレンスの場面があり、行き詰まったときは職員同士で知恵を出し合うこともあります。経験を重ね広い視野とイメージする力、発想力を身に着け利用者に満足して帰っていただけるような図書館員になりたいと思いました。

また、本のページのコピーを見ながら、本の題名を想像するワークショップや、ご自身が監修された『図書館のひみつ』（ＰＨＰ研究所）ウラ話、現在改修中の神奈川県立川崎図書館で保存されていた50年前のレファレンス事例、社史の魅力なども紹介していただき、時間が過ぎるのがあっという間の中身の濃い研修となりました。

基礎講座の様子

図書館職員専門講座兼日本図書館協地方講習会

11月16日に津市の三重県総合博物館で専門講座を開催しました。「図書館でチャレンジ！ブクブク交換」をテーマに、ブクブク交換主宰のテリー植田氏を講師にお招きしました。日本図書館協会地方講習会と併催で開催し、東海北陸地域の図書館職員の方にもご参加いただきました。また、博物館と連携し、午前中には博物館のバックヤードツアーも行いました。この研修には35名にご参加いただきました。参加された方の中から、個人会員の坂口智子さんにご報告をいただきました。

図書館職員専門講座兼日本図書館協会地方講習会に参加して

個人会員　坂口智子

昨年3月に定年退職した私は、今回の講座には仕事のためではなく自らの好奇心から参加させていただきました。「ブクブク交換」とは初めて聞く言葉なので、事前に公式サイトで予習をしました。「ビブリオバトル」とは「似て非なる」印象でしたが、共に本を介したコミュニケーションツールであることに違いありません。

「ブクブク交換」のルールはシンプルで、テーマにあった本を持参して自己紹介を兼ねて本を紹介した後に、それぞれの本を交換するというものです。本には予め一言コメントを書いた付箋を貼って、自分の連絡先（職場等）を書いたメモ（名刺等）

を挟んでおきます。これが本を交換した後のコミュニケーションへとつながっていきます。

6グループに分かれての演習では、参加者が持参した本に対する熱い思いを語り、瞬く間に時が過ぎていきました。講師先生から指名された各グループ1名の方の本の紹介も聞くことができました。最後に全員の本を1カ所に集めて、各自が本に貼られたコメントを読んだり手に取ったりして、気に入った本を選びました。参加者35名でしたが、タイトルが重複する本は1冊もなく、すべての本が新たな読み手の元へと届けられました。

仕事を離れて個人的な興味から参加した私でしたが、研修中は3月まで勤めていた職場（県立高校図書館）でどのように活用できるかという問いから逃れることができませんでした。しかし、それはもはや果たせぬ課題。これからの私は、この研修を今後個人の立場でどのように生かせるかという新たな「宿題」を課せられたように思いました。

専門講座の様子

視察研修

先進的な取組を行っている図書館を視察し、見識を深める視察研修を、1月18日に実施しました。愛知県の安城市図書情報館と金城学院大学図書館を視察したこの研修には、29名にご参加をいただきました。参加された方の中から、ユマニテク短期大学図書館の辻泉さんにご報告をいただきました。

視察研修に参加して
ユマニテク短期大学図書館　辻泉

平成30年1月18日、視察研修に参加させていただきました。

まず訪問した安城市図書情報館は、平成29年6月に「アンフォーレ」という複合施設の一部としてオープンされました。1階は総合案内・カフェ・多目的室があり、マルシェなどを開催。2階から4階が図書情報館で館内は吹き抜けとなっていました。別棟にはスーパーマーケットやカルチャースクール、駐車場などの民間収益施設が併設されていて、駅近で利用しやすい中心市街地を活かした全く新しい施設として稼働していました。今までの図書館の概念を取り払った、おしゃべりや軽食・ふた付飲料利用可、自動貸出・返却、予約、日本全国利用者対応等々、様々な画期的運営がなされていたことに、大変驚き、感動をしました。これは、「会話と飲食を認め、交流と対話を充実させる」「ジャンル別配架」「自由化・省力化を取入れ、レファレンスに重点をおく」「学校図書館との連携を図る」という4つの取組に基づくもので、オープン以来、80万人が利用し、大きなトラブルもなく各観点から実績は倍増しているとのお話で、この先も期待が膨らみました。

次に、金城学院大学図書館を訪問しました。風格のあるキャンパス奥に図書館はあり、蔵書数は51万冊。運営には学生ボランティア「LiLian」が大活躍、選書や学内展示だけでなく、書店・公共図書館とのコラボなど、学外にも活動が広がっているそうです。学生との橋渡しや、地域貢献を果たすなど、素晴らしい存在となっていることに感心しました。また別棟のラーニングコモンズが、フル活用されていたのも、刺激的でした。

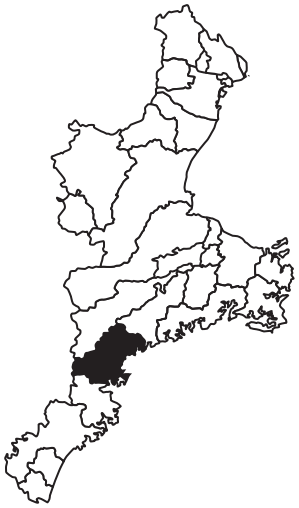
今回の視察で、何か自館でも取り入れることができるのではないかと、奮い立つ想いになりました。

安城市図書情報館

金城学院大学図書館

新館案内

紀伊長島図書室



多目的会館図書室は、平成29年3月11日に紀北町地域振興会館（旧紀伊長島総合支所）の2階に移転リニューアルされました。それに伴い、名称も紀伊長島図書室へと変更しました。

整備にあたっては、書架の高さを抑えたことで上段でも本に手が届き、児童にも利用しやすく、通路も間隔を広くとってあるので、ゆったりと落ち着いて、本選びをすることができるよう配慮されています。さらに、閲覧・学習コーナーの机には尾鷲ヒノキが使用されており、木材製品ならではのやさしい雰囲気も楽しめます。

図書室の蔵書冊数は、一般図書と児童図書のほかＤＶＤなども含め約２万冊。児童図書も多く、地元関連の資料も充実していて、小さなお子さんから大人まで楽しめます。

本を探したいときは、タッチパネル式の書籍検索機で簡単に検索が可能で、紀伊長島図書室だけでなく町内の図書室（児童図書室・海山図書室）の蔵書検索や貸出予約もできます。また、新しく入荷したおすすめの書籍は、新刊コーナーに分かりやすく配置しています。

閲覧コーナーと学習コーナーは、景色が見える窓側のスペースに設けられており、美しい江ノ浦湾を眺めながら読書や学習ができます。そのほかに、机や椅子を低くした児童専用の閲覧コーナーや幼児専用の絵本コーナーも設けられています。

学習コーナーでは、学生が落ち着いて勉強に集中できるようにと、各席に間仕切りを設置し、学習しやすい環境が整えられています。

絵本コーナーは、部屋になっており、ここでは絵本や紙芝居などの読み聞かせもできます。床は安全面を配慮し、コルクタイル敷きで、室内でも明るく、壁面に花柄のイラストを使用しているなど、小さなお子さんにやさしいつくりとなっています。

このようにリニューアルされた紀伊長島図書室は、利用者のことを考えた、居心地の良さや利便性を高めた図書室となっていますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

ブックエンド

『いるのいないの』
（怪談えほん 3）

京極 夏彦 ／作，町田 尚子 ／絵，
東 雅夫 ／編
岩崎書店

鈴鹿市立図書館
藤田かをり

怪談えほんシリーズは、どの本も個性的な怖さがありますが、その中でもこの『いるのいないの』の単純な怖さは一番だと思います。

田舎の祖母の家に一人で来ている「ぼく」の心細さや、頼りにしたいのに心もとない返事しかくれない祖母のせいで、ますます膨らんでいく不安が読者を引き込んでいきます。

同シリーズの本は大人でも充分怖いので、子供向けとは思わず、覚悟して手にとってみてください。